

宗教に見る多文化共生

——文化相対性と普遍性を思惟^{しい}する

異なる価値観を楽しむことができる境涯、自分の立場や価値観にしがみつけない心の自由さこそ、多文化共生の真髓ではないか。

桜美林大学 副学長 馬越恵美子

この原稿をしたためている現在、世界は新型コロナウイルスと戦っている。まさかオリンピックイヤーだった2020年にこのようなことが起きると誰が予想しただろう。中国武漢の様相を対岸の火事として眺めていた数カ月後に世界規模のパンデミックに発展するとは。1日も早い終息を願いながら、人類の有史以来の課題である多文化共生について宗教の面から改めて理解を深めてみよう。

考え方や文化の違いはどこから

平成から令和に変わる昨年5月、私はモロッコを旅して、サハラ砂漠で遊牧民のベルベル人と何日も関わることになった。カサブランカからマラケシュに行き、さらに世界遺産のアイト・ベン・ハッドウの村のベルベル人の民家でミントティーをいただいた(写真①)。その後、アトラス山脈の長い山道を走破し、カスバ街道を走り、サハラ砂漠に。そこからラクダに乗り、ベルベル人の案内でサハラ砂漠のキャンプ地に



(写真①) ベルベル人の民家で

(写真②)。夜はすさまじい砂嵐に見舞われて、あまりの恐怖に思わず神仏に手を合わせた。旅の終盤には、首都ラバトに立ち寄ったが、



(写真②) ラクダでキャンプ地に向かう

そのガイドから、イスラムの教えでどれだけ自分や家族が助けられたかという熱弁を聞く羽目になった。彼曰く「ラマダン^①は国王から貧しい人までひもじさを経験し、平等に忍耐を学ぶ。喜捨は富む人のみならず、貧しい人はさらに貧しい人に喜捨する機会がある。どのモスクに行ってもイスラム教徒であれば祈ることができる」と。なるほど、貧富の差が大きく、厳しい自然環境で移動の機会も多い人々にはイスラムの教えは合っていると感じ入った。宗教は人々の生活に根差して発展するものであることを思えば、それぞれに合うベストプラクティスがあるのは当然であろう。まさにそれが文化相対性である。

宗教における不変の真理とは

話はかなり前のことになるが、かつてフランスに留学した時、同じ寮にいたミリアムという伯爵令嬢と親しくなった。彼女は検事を目指して勉強していた。

ところがあるとき、神の啓示を受け、カルメ